

平成20年度 県と市町の地域づくり支援会議

第2回桑名・四日市・鈴鹿ブロック会議における先進地視察の結果について

1 実施日

平成20年10月23日(木)～24日(金)

2 参加者

- ・ブロック会議構成員(北勢5市5町、桑名・四日市・鈴鹿県民センター)等27名
- ・政策部「美し国おこし・三重」推進室職員
- ・ランダアソシエイツ代表取締役宮本倫明氏



3 目的

「文化力」を生かした自立・持続可能な地域づくりを目指し、2009年(平成21年)2014年(平成26年)の6年間にわたり「美し国おこし・三重」の取組が^{うま}全県で展開されることから、県と市町の地域づくり支援会議ブロック会議の構成員等が、「美し国おこし・三重」の基本計画の策定・調査を受託するとともに、「えひめ町並博2004」の総合プロデューサーでもある宮本倫明氏とともに「えひめ町並博2004」で取り組んだグループや地元市町職員等との意見交換、現地視察を行い、グループの掘り起こしや座談会における市町の関わり方等についての認識を深め、今後の市町における「美し国おこし・三重」の取組の参考とする。

4 行程

(1) 一日目(10月23日(木))

意見・情報交換 [別記1]

大洲市内の町並視察

3班に分かれて案内人から町並みの案内を受ける。

大洲市職員との意見交換 [別記2]

基調講演、「大谷文楽」講座・体験、地元グループとの意見交換 [別記3]

(2) 二日目(10月24日(金))

内子座見学

レトロバス体験乗車(JR内子駅前旅里庵～町並駐車場)

内子町内の町並保存地区視察

2班に分かれて案内人から町並みの案内を受ける。

地元グループ及び内子町職員との意見交換 [別記4]

(別記1)

車中における意見交換等について

1 日 時

平成20年10月23日(木)

2 内 容

(1) ビデオ視聴

「えひめ町並博2004」PRビデオ(約5分)

(2) 宮本倫明氏あいさつ・説明

- ・「えひめ町並博2004」は南予地域でイベントをつなげて実施した。三重県でいえば東紀州活性化にあたる取組。
- ・市町村合併等による地域を取り巻く環境の変化によって、地域社会の一体感、人との絆が弱まっている。

(3) ビデオ視聴

「えひめ町並博2004」紹介番組(約30分)

(4) 各市町における「^{うま}美し国おこし・三重」の取組状況等にかかる報告と意見交換

ア 取組状況等にかかる報告

市町：市民活動をしている市民が集まる場で、「^{うま}美し国おこし・三重」について説明の機会を持つ予定。その後に、座談会へつなげていきたい。

宮本氏：観光や環境など、言葉で言うとかしこまった印象を与えるが、グループ活動を行う人たちは、地域のことを自分たちで良くしていこうという志のある人がほとんど。

市町：役所内の推進体制については、部長級が出席する会議で「^{うま}美し国おこし・三重」の説明会を開催した。山から海まで広い。地域エリアで分けるのか、分野で分けるのか検討している。環境や農業など部局ごとに説明会を実施して進めていく予定。

宮本氏：座談会の声かけの仕方は一通りではない。進め方もいろいろある。各市町の課題に応じて進めればいい。

市町：規模の小さい自治体は職員配置や体制が難しい。座談会開催を周知したうえで、グループにそっぽを向けられないようにすることが大事。

宮本氏：財政的支援の取り合いにならないようにする必要がある。一方でチャンスをつぶさないためにも、グループの立ち上げ、活動維持に助成は必要。

市町：県と市町の関わりの整理が必要。各自治区やまちづくり協議会との整理をどうするか考えている。地域の人々と話し合って進めていく。

宮本氏：既存のグループでも構わない。登録はプロジェクトグループに必要なが、グループの名称は今のままでいい。地域づくりの道具、ツールとして使ってもらえばいい。えひめの人形文楽は既存で活動していたグループ。既存の自治会や協

議会も対象となる制度。

市町：財政負担の件、窓口対応等、市町は長期的に住民と関わっていく必要がある。

宮本氏：取組の期間が終わった後も悪影響のない形とするため、初期投資部分に対して1回限りの財政的支援を行う。取り組んで何が生まれるのか、どのように継続していくのかをしっかりと考えた。補助金が終わったら活動できないという苦情がグループから出ないかと心配する意見を聞いたが、愛媛ではそうしたことは1件もなかった。地域づくり支援は一気に解決する方法がないので、じっくりやっていくしかない。

市町：「市民会議」を開催した。声をかけないグループからは、なぜ声がかからないのかという意見が出た。

宮本氏：自立継続、1年限り、初期投資に限ることを条件に、グループへの助成条件を絞っていった。観光や農業は馴染みやすいが、環境や福祉などはすぐにお金を生み出しにくい、現金化されにくい。だからといって、環境や福祉は全てを役所がすべきという意見はどうかと思う。地域社会に利益を還元するものがコミュニティービジネスという定義になっている。ゴミの収集によって得られる利益を地域へ還元する環境活動に取り組んでいるグループがあり、注目している。

市町：住民による歌舞伎を継続、継承していきたい。

宮本氏：歌舞伎を教える人も含めて継続することが大事。大谷文楽は継承者がいない。外部にアピールすると、思わぬ支援者が現れることがある。これからは映像や文書で外へ向けて発信して欲しい。

市町：輪中のまち。自分たちの生活は自分たちでは気が付かないが、外からは珍しいようである。気が付くところを一からやり直したい。

市町：既存のグループの中でバージョンアップ出来そうなグループをいろいろ考えている。座談会の開催をホームページや広報で周知しても、どれだけの人が集まってもらえるかわからない。庁内の取組体制を推進するため事業概要の説明会を開こうと思っており相談させてもらいたい。グループの活動が持続していくには、リーダーの存在が必要になる。立ち上げたグループにリーダーが出てくるか心配している。

宮本氏：座談会の声のかけ方はあえて示していない。自然体でやっていくしかない。いろんなところで座談会の声かけをして、周知を図るのが一つ。リーダーが育ってくるかどうかは、その過程でリーダーが自然に出てくるのを待つ方がいい。それまで待つこと。リーダーは1人に限らず、複数いてもいい。

市町：70 超の市民活動団体の他に未登録の団体もあり、座談会は多くのグループに参加を呼びかけたい。市域内の関係者を含めた推進組織設立の見通しについては、他市の状況を見ながら、新年度には発足させていきたい。

宮本氏：「えひめ町並博 2004」も同じように取り組んだが、2割のグループは活動を継続

出来なかった。グループ間同士の連携や励まし合いが大事だとわかったので、ワールドカフェ方式（集合并戸端会議）という新しい手法も使っていく。僅かな時間で参加者全員が自分たちのグループに何ができるのか、他のグループが何を求めているか理解できる。アメリカで始まった方式。

イ 意見交換・質疑応答

市町からの意見

- ・まちづくりで苦労する点は継続性。地域住民の意識がまとまること、協力体制が一番大事である。
- ・継続には経費が問題。「美し国おこし・三重」を実現するのは大変。
- ・市町が関わってグループを作ると自立しにくい。行政主導でなく、地域主導でないと続かないと思う。

鈴鹿県民センター

- ・これからの地域づくり支援は「美し国おこし・三重」の考え方と合っており、ブロック会議の共通テーマとしても相応しいということで、取り組むことになった。

宮本氏

- ・自主的に活動するグループを自立できるように対象としていく。今は自治会が崩壊しているところもある。自治会がビジネスをやろうというところもある。協議会という単位も含めて一緒にやればおもしろい。

(別記2)

大洲市職員との意見交換について

1 日時及び場所

平成20年10月23日(木) 16:30~17:45 大洲市役所ホール

2 内容

「えひめ町並博2004」を担当した大洲市職員3名を助言者に向かえ、3班に分かれて意見交換を実施。

- ・大洲市役所へ県の事務局が駐在して県から職員が派遣されて以降、県側の熱意が市へ伝わり、そこから市職員が意欲的に取り組み始めている。地域づくり支援には、職員のやる気と人員の確保が重要である。
- ・グループには自立・持続のために必要な財源を確保する意識が十分でない場合があることから、その意識を変革すること、新たに収益性を確保するための専門家による助言等の人的支援が行われている。
- ・グループ活動を継続するには、志のある人たちが目的を持って活動することが必要。新たなグループの育成を市が主導しても、求心力を持つ人がいないと続いていない。
- ・イベントや制度のPRには、広報やホームページなどを活用した全体的な周知では限界があるため、それとは別に既存グループや団体等へ個別の対応が行われている。

- ・活動内容が営業の性格の強いグループに対しては、まちづくりに貢献する場合に限り、認証だけが行われ、財政的支援は行われていない。
- ・「えひめ町並博 2004」の開催によって、赤煉瓦館で焼いたパンを出す際の器が別のグループから提供されるなど、今まで全くつながりが無かったグループ間において連携した取組が生まれた事例がある。
- ・カヌー体験は、カヌーの愛好家が川の良さを知ってもらうために始めたメニューで、カヌーや川は好きだが、地域おこしに高い関心があった訳ではなく、座談会における助言を通して取組が発展していった。
- ・財政的支援の採択にあたり、外部委員の入った審査会が市に設置されて、自立・持続性等に関して審議されている。申請書が市へ提出される前に座談会で検討して、助言を行うなどにより、採択可能な段階にまでブラッシュアップしている。
- ・えひめ町並み博は、県を中心イベントと市町が中心の自主企画イベントを連携させた催し。2002年から準備を始めた。
- ・住民グループとの座談会のとりかかりは、商工会議所、青年部などからスタート。最初は一本釣り。田舎でもあり、自分からやろうとする人は少ないが、背中を押してやればやるという人はたくさんいる。CATVなどで宣伝をしたが、集まった人が次に声をかけるという感じ。
- ・行政に対する不平・不満を聞くところからスタート。
- ・振り返ってみて、初期の頃有効だったのは、話し合う場所（会議室）を提供すること。意外に良い場所がない。
- ・大洲市のイベント予算は3,000～4,000万円（主にPR費。ハードは別。）
- ・住民団体への支援は、上限100万円で、県の認定後、県・市1/2ずつ費用負担し、県が出したものを市で受入して交付。15グループ×50万円=750万円程度（実際には50万円に満たないところも多くもっと少ない）

（別記3）

基調講演、「大谷文楽」講座・体験、地元グループとの意見交換の概要について

1 日時及び場所

平成20年10月23日（木） 18:40～21:00 鹿野川荘にて

2 内容

（1）基調講演

講師：株式会社おおず街なか再生館 代表取締役専務 河野達郎 氏

- ・目的はいかにして経済効果を地元へ起こすかであって、地元利益を提供するもので

はない。プロデュースの能力である。

- ・「えひめ町並博 2004」の時に「ひじかわ遊覧」に取り組んだ。昼間に空いている屋形船を活用するもの。着地型の旅行業をするための資源となった。ブレイクして多くの人が来てくれた。大洲に来てくれる人をいかに楽しませるか。
- ・イベント終了後、2年目に観光客の減少をいかに少なくするか、継続のためには、力を入れてフォローすることが大事。
- ・体験メニューは他の地域にもたくさんあるが、何が違うか。地元の人たちと座談会を開催して、目的は都会の人との交流であることを地元の人に説得した。体験してもらうのではなく、地元の人を手伝ってもらうという位置づけにした。都会の人に田舎の生活を知ってもらい、伝えてもらうこと。
- ・住民の意識、県や市職員の意識、グループや企業の意識、この3つの意識をうまくまとめることが大事。この3つは全然違う。
- ・お金が生まれるイベントを誰がプロデュースするか。地域に合ったメニューをやっていくか。「販路構築」が大事。
- ・人々、自然、生活習慣の歯車を回すと、歴史、文化、伝統が回り出す。

(2) 「大谷文楽」講座・体験

- ・大谷文楽保存会による上演と操作体験

(3) 地元グループ等との意見交換について

- ・後継者が不足しているため、地域外から希望者を招いて体験講座を開催し、後継者の育成や伝承を目指しているが難しい。
- ・体験講座を行うことで、地元と体験者の交流を目指している。
- ・地域の小・中学校で児童・生徒に体験講座を開催している。

(別記4)

地元グループ及び内子町職員との意見交換について

1 日時及び場所

平成20年10月24日(金) 10:40~11:55

内子自治センター 第1班:多目的ホール、第2班:和室

2 内容

(1) 第1班

地元助言者 内子町職員1名、「レトロバスを走らす会」2名

- ・内子駅から内子の町並みを抜けたところにある駐車場までレトロバスを運行し、観光客が歩くのを片道で良いようにしている。(800円)
- ・併せて、駅前で観光案内所である旅里庵(たびりあん)を運営している。

- ・レトロバスは3台あり、300万円、500万円、無料（要修理）で購入。
- ・レトロバスを走らせたいという夢、希望がかなったのが町並博。
- ・メンバーはJCや商工会などがベースとなっている。
- ・座談会でのアドバイザーは、さまざまな法規制をクリアする必要があったので、役に立った。
- ・レトロバスを町の人たちに認めて欲しいという思いから、今もいろいろな取組をしている。
- ・事業が継続しているという点では成功だが、現在は赤字運営であるため、今後改善していく必要に迫られている。（バスを3台に増やしたが、遊んでいることが多い。増やしたバスの管理経費の分だけ赤字になっている。）
- ・現在は、10名が中心となって運行している。
- ・内子町に、NPOが300以上あるが、立ち消えとなっているものが多い。情熱が続くのは3年といわれている。自分たちのモチベーションをどう保っていくかも課題。
- ・S57年に伝統的町並み保存地区に指定されてから、内子町に観光というものが出来た。行政主導の体質だったが、近年、「レトロバスを走らす会」のような元気な団体が出てきている。町は経費的な運営支援をしていない。

（2）第2班

地元助言者 内子町職員1名、「工房夢ふうせん」2名

- ・平成17年に3町が合併した。「工房夢ふうせん」は旧小田町で商工会の女性部を中心に活動していた。
- ・平成14年に「工房夢ふうせん」の取り組みが始まった頃は、商工会から補助金が出た時代だった。えひめ町並博の期間中はのれん作りだけで終わっていた。
- ・座談会が町主催で開催され、「工房夢ふうせん」の取組について聞き取りが行われ、もっと売れるのではないかという助言を受けた。商工会や町から補助金が出なくなった状況で、町から人的支援を受けるようになった。女性が喜ぶ商品開発に向け、草木染めに取り組み始めることになった。
- ・旧内子町は町並にいつも観光客が入っている一方、旧小田町はスキー客くらい。小田町へも来て欲しいという強い想いで体験教室を実施した。
- ・年間通して材料のあるもので染めることを考えた。ストールなど身につけられるものを作っている。
- ・現在は、毎週月、水、金の夜に作業をしている。グループのメンバーにとってもメリットのあるものにしようと取り組んでいる。手当は1時間100円から始まり、今は300円。
- ・「工房夢ふうせん」には商品があっても、販路が開拓できていなかった。
- ・内子町は宣伝やメディアを活用することが上手い。平成16年12月に道の駅がオープンし、道の駅に草木染めのコーナーが設置された。南予・旅コレクションカードを

作成した。松山空港へ出展したほか、全日空から注文を受けた。

- ・「えひめ町並博 2004」がなかったら、レトロバスと「工房夢ふうせん」の広域的な連携は生まれなかった。旅里庵にかけるのれんを柿渋染めで作って欲しいという依頼を受けた。
- ・体験教室に参加してもらくと、受講に 3,000 円、昼食に 1,000 円程度、さらに土産のお菓子を買ってもらくと、3,000 円くらいを使ってもらえる。